

アイルランドのブラスケット島について

渡部悦子

キーワード：ブラスケット、ペイグ、ケルト

1. はじめに

ブラスケット (Blasket) 島は、アイルランド共和国の南西のディングル地方の沖に位置する島である。アイルランド共和国は、日本の北海道くらいの大きさであり、ブラスケット島は、さらに小さな島である。正確には、ブラスケット島は、いくつかの島が集まった諸島である。その中で一番大きい島が、The Great Blasket と呼ばれている。ここでは、この The Great Blasket をブラスケット島と呼ぶことにする。

いつから人が住み始めたかは、定かではない。鉄器時代のものと考えられるリング状の要塞が残っていたり、石の十字架が残っていたりするの、かなり昔から人が住んでいたと考えられる。13世紀に、デズモンド公 (The Earl of Desmond) がこの島をある家族 (The Ferriter family) に貸すという文書が残っている¹⁾。

島は、険しい崖と少しだけならかな斜面で成りたっている。水平な面は1㎡もない。また、木は、一本も生えていない。この島の西には、アメリカ大陸まで3,000マイルの大西洋が広がる壮大な景色があり、この島はアメリカに一番近い地なのである。

現在、島には、季節的住人がいるがいわゆる定住者はいない。1958年に全員アイルランド本島に移住したのである。1841年には、島の人口は153名だったといわれている¹⁾。1845年の大飢饉のあとの1851年には97名に減っている¹⁾。Joan & Ray Stagles が “the main island, which was at a later date estimated by one observer to be capable of supporting perhaps a score of people” と書いているように¹⁾、20人程度を養うのがやっとの耕作地しかない島なのである。したがって人々の生活はとても貧しく、苛酷なものであったと思われる。わずかな土地にジャガイモを植え、魚を捕り、海草を採り、流木を拾い、燃料となる泥炭を本島から運び、羊、ヤギ、鶏等を飼って生活していたことが、ペイグ・セイヤーズの “An Old Woman's Reflections”²⁾ から窺える。医者も教会もなく (島人は、日曜毎に、本島の教会に行っていた)、海が荒れると孤島になり、人が死なないように、また、病人が出ないように祈りながら暮らしていたのである。特に冬は、寒風吹きすさぶ厳しい環境となったと考えられる。

なぜ、この小さな島に注目するのかというと、住民達は、ケルト民族であり、彼等はゲール語 (アイルランド語) を話していたが、少ない人口にもかかわらず、独特の文学を多く生み出しているのである。その特徴は、学校教育を十分に受けていない人々が創り出した文学であり、炉辺のストーリーテリング (storytelling) の伝統が生み出した文学なのである。

本研究では、この島が生み出した女性のストーリーテラー (storyteller) であるペイグ・セイヤーズ (Peig Sayers) の *An Old Woman's Reflections*²⁾ からブラスケット島と彼女の文学の特徴を探ってみる。

2. ペイグ・セイヤーズ

ペイグ・セイヤーズ (1873-1958) は、ブラスケット島に生まれたのではなく、ディングル半島の先端に位置するダンキン (Dunquin) で生まれた。ペイグの父もストーリーテラーであった。このディングル半島は、ケリー (Kerry) 地方ともいわれ、この地では、詩の才能は父から娘に、物語の才能は父から息子へ伝わるといわれている。しかし、娘のペイグは、兄弟と同様に物語の才能を父から受け継いだのである。

ペイグは W. R. Rogers に父の最期を語っている。²⁾ 98歳の父は「赤牛」 (The Red Ox) の話を語っていた最中

に言葉が出なくなってしまった。ペイグが「お父さん、死にかけているの？」と聞くと、父は「いや、違う」と答えた。娘は、「死が近いので、つかえたのでしょう。今まで、話が途切れることは一度もなかったわ。お父さん、もう終わりなのよ。」と言う娘に対し、今際の際の父は「死は、まだコークから、自分のほうに向かって出発していない。」と言ったという。コークは、アイルランド本島の南岸にある大きな都会である。そして9日後に彼は、他界したという。

この時 W. R. Rogers にペイグは、次のように語っている²⁾。

“That was the chief pastime then, storytelling and talking about old times. But that's not the way now. They no longer care for stories, and the stories would have died out altogether, for the young people weren't ready to pick them up.”

これは、20世紀の中頃の若者は、かつてのように物語の聞き語りに興味を示さなくなっていることを嘆いているのである。日本ではなお落語などの伝統が残っているのにどうしてだろう。ペイグは続ける。

“…But now, thank God, there's a gadget for taking them down, if there were any storytellers left, but there aren't.”

“gadget”は、録音装置のことと考えられる。でも、装置があっても、こんどは、語り部がいなくなってしまったというのだ。

“…For the old Gaels are dead and the new generations rising up don't know Irish well. That's a great pity because Irish is a noble and a precious language.”

ゲール語、アイルランド語が使われなくなったというのだ。そのことと語り部がいなくなったこととは、ある意味で連動している。しかし、ペイグは、希望を全く失くしたわけではない。

“…But it is coming to life and regaining strength. And it is short, with God's help, until it will be blossoming again as it was in olden times by the old people who have left us. May God give eternal life to their souls and to our own souls when we seek it, Amen!”

と、ゲール語とその文化が再び華開く日を来ることを予言し、また祈念している。

2002年の夏、筆者がディングル地方を調査で訪れた際、この地域に、まだゲール語を話す人々がいることを知った。毎年、ダブリン大学のアイルランド語科の学生たちが夏の間、ディングルにゲール語研修に来ているという。

ペイグは、ブラスケット島の人と結婚して、人生の大半を島で過ごした。ペイグは、結婚の当日まで、相手を見たことがなかったそうであるが、大柄な二人は、一生相思相愛の人生を送ったそうである。ペイグは、ストーリーテリングに対し、きのこを一本送られたとき、まるで金杯を受け取るように恭しく受け取っていたのを近所の人が見ている。ペイグのストーリーテリングは、ほとんど無報酬であったのであろうか。

3. *An Old Woman's Reflections*

*An Old Woman's Reflections*²⁾ は、ペイグがゲール語で語ったものを、Oxford University Press が英語に翻訳したものである。このペイグの話のなかで描かれている興味深い島の生活と実話の内容を項目をつけて以下に挙げる。

3. 1 生命がけの仕事

島の農業だけでは食べていけないので、男たちは荒海に細いカヌーをこぎだし、漁をしていた。時として船は転覆し、命を落とした。転覆したらしいという知らせに妻や、母親は慌てふためき嘆き悲しんだ。夫と息子を同時に亡くしたと思った女性は、夫より息子の死をいたみ嘆き悲しんだ。これは、ペイグの女性ならではの観察眼であろう。島の生活は、いつも死の危険と隣り合わせであった。

海草採りの船が遭難しそうになり、採取していた海草をあわてて海に戻したが間に合わなかった話が出てくるが、イギリスでは一般に海草を食べる風習がないのに、この地方では海草をどのように食していたのであろうか。

3. 2 豊かな国際色

ペイグの物語のなかでは、好きな女性との仲を親に反対されて逃げていく先は、アイルランド本土や隣のイギリスではなく、はるか大西洋を隔てた北アメリカや南アメリカなのである。ある話では、ブラジルにたどり着くが、結婚に反対していた母と自分の彼女が仲良くしていると同郷人から伝え聞き、お金をためて帰ってきた息子の話がある。

突然、アメリカの縁者から大金が入り、長い間家出をしていた妻が帰ってきたと言う話もある。これは、中国の「覆水盆に帰らず」と似ていて、夫は自分を大事にしなかった妻を退け、若い女性と再婚したという話である。

メキシコ出身の若者が、ブラズケット島を訪ねて来た話が載っている。彼は、なんと、ゲール語が話せるのである。両親がゲール語を使っていたので、自らのアイデンティティを求めて、ブラズケット島に来たのである。

話の各所から、貧しさから新天地であるアメリカへ渡った人も多くおり、彼らからの送金に頼って生活していた島民も多かったことが読み取れる。

3. 3 結婚にまつわること

島の人たちの結婚は、基本的には、仲人（matchmaker）によって相手探しをすると言う。ペイグの話のなかで、人々の集まりの折に歌を歌って、相手が決まる話が二つ出てくる。その一つは、求愛する男性の歌に当の娘は応えなくて、その場にいた他の男性を娘が選ぶという話である。娘が選んだ若者は歌が上手に歌えないばかりか、身元の分かる島の出身者ではなかった。ある人が妬みから娘の父親に婿の実家の悪評を吹き込んだため、若い二人は家を出て小さい別の家で暮らす。あるとき、妻の父親が喧嘩に巻き込まれているのを知り、この夫婦、Thomas と Margaret は次のような会話をする。

‘This is a funny tale we have today. Your father is in danger of being killed without any being there to help him.’

‘If there's treachery, it returns!’ said she. ‘My father was treacherous to you and how could you go in danger or jeopardy for him? Don't mind it.’

‘Good against bad is the noblest action, little woman,’ said Thomas. ‘Come on with you! We'll go to the spot, whatever.’（‘ ’；原文のまま）

自分たちを裏切った父のために何もするなという妻に対し、悪に対し善を成すのは最も崇高な行為だと言って夫は助けに行く。なんと心を打つ話ではないか。狭い島の中でぎくしゃくしてしまった人間関係を、大西洋の海原のような広い心で克服していく知恵と勇気に感動させられる。

もうひとつの話は、ある milk house のミルク売りの美人が、何人もの若者が言い寄ってくるのに彼らには振り向かないで、彼女はあるハンサムな若者に心を寄せるところから始まる。ある結婚式の集まりに島外からの若い娘たちが出ていた。その場でそのハンサムな若者は島外からの若い娘たちひとりずつに歌を所望した。誰も歌おうとしなかったとき、思い切って歌を歌った島外から来ていた一人の娘と彼は結婚をした。その歌は彼を褒め称える内容で、歌を歌うこと自体が結婚をしてもよいということを含んでいたのであろう。概してゲール語での歌は、シンプルでかつ即興で作って歌うのである。この結婚を妬んだミルク売りの娘は、この若い妻をいつも見張っていて、若い妻が家の外に出ると、いっぱい石を投げつけた。ある時は、家の中にまで投げ込まれた大きな石でジャガイモ入れの壺が壊されたほどである。

そうこうしているうちに、赤ん坊がその夫婦に生まれたのだが母乳が足りない。若い母親は、赤ん坊を夫に預け、この milk house まで出かけるのである。そこで、この妻 Nora とミルク売りの Nancy Daly は、取っ組み合いの激しい喧嘩をするのである。そして勝ったのは、Nora であった。Nora は Nancy Daly に次のようにいう。

‘“Go now,” said Nora, “and don't tell where you were, and don't look over your shoulder at me as long as you live. The lovely looks you had coming, it's different appearance you have now! But when you've healed you can give your love to somebody other than Sean O'Flaherty.”（‘ ’；原文のまま）

人を妬んで暮らす今のあなたの容貌は以前のように麗しくないと、相手を暗に認めて褒めながら、諷める言葉であ

る。今のままでは、誰も愛せなくなるとも言っている。厳しい状況での Nora の行動と発言は、彼女の優れた人間性と暖かさを示している。女性が、他の女性の容貌を面前で褒めることは、なかなか出来ないことである。

これらの話は、若者達には特に含蓄の深い内容として、意義深いものであったろう。

3. 4 蒸気機関車と自動車

ペイグは、ディングルのウェザーウェルへの巡礼（‘Wethers’ Well Pilgrimage’）に友人たちと出かける。そこで、生まれて初めて蒸気機関車に乗った。巡礼者が多くて、席取りは大変だった。行きは、立って外の景色を眺めていた。帰りの乗車で一悶着あった。誰かが、座席にコートを広げて席を取っていた。そこで、ペイグたちは、そのコートをたたんで、空いた場所に座った。そこへ、席を取っていた二人の男がやってきた。一人は懐中時計をちらつかせる太った巨漢である。そして、誰がコートをたたんだのかと詰問してきた。ペイグは、それは自分だと言った。

‘‘Twas I moved it, good man,’ said I.

‘Where did you find it in yourself to do the like?’ said he, and anger in his voice.

‘Because I understand the overcoat to belong to one person and that by right it deserved only one man’s space, and if you haven’t your entitled space, righteous man, I will leave this place to you. Though there’s good bulk in you, I think you have enough room, because I have bought this seat as well as you. There was no bad penny in my money when I paid for it.’（‘ ’；原文のまま）
ペイグは、威張った男二人と堂々と渡り合ったのである。自分も同じ料金を払っていること、オーバーコートは、一人分で、その分はスペースを残していること、それでも、もっとスペースを主張出来るなら（その権利があるなら）私は譲りますと、じつに見事に応戦したのである。男たちは、互いに相手に自分のひぎに乗るかねと言ったり、女には敵わないと言って、諦めるのである。

ペイグが、初めて自動車に乗ったのは、未亡人年金の申請のためにディングルの役所に行ったときである。ペイグは、新しい文化、文明が押し寄せてきたのを実感したであろう。それは同時に、古い文化、すなわち、島の暮らし、ゲール語、ストーリーテリングなどが失われていくことでもあった。

3. 5 ゲール語の喪失

先に述べた巡礼の折、途中で入ったレストランでのことである。パンが足りないのもっと欲しいということをして Sean はウェイトレスに言うのだが、ウェイトレスは、クスクス笑ってその場を立ち去り、他の客へのサービスに専念して、一向にパンを持って来そうになかった。ゲール語では通じなかったのだ。ついに、仲間の Thomas が立ち上がり、大声で英語で叫んだ。

‘MORE BREAD, NONIE!’

パンはすぐに来た。たった3語で通じたことに、Sean はたいそう悔しかった。Nonie は、知っているウェイトレスの女の子の名前なのであろう。ゲール語が通じなくなっていくもどかしさと、必要な語だけしゃべれば、なんとかなる現実をペイグは知るのである。

先に述べたメキシコからの訪問者がゲール語を話す人々と地域を知ることによって自分のアイデンティティを確かめるために島に来たと言う話は、言葉が人間の存在にどれほど大きな位置を占めるかということを示し、ペイグにとっては重要な話であったろう。

3. 6 村の生活

ペイグの話から、当時の村の生活が彷彿とよみがえる。かわいがっていた鶏が消え、畑をつついて掘り返して探す話。まだ、大きくなってないジャガイモをどうして掘り返すのかと怒る夫。でも、鶏は、土のなかに埋められていた。多分、狐が次の日に食べようと思って、埋めたのだらうという。

一緒に巡礼に行行って世話をしてやったのに会っても挨拶もしないと怒ったある村人は、人を使って彼女が庭で日干しにしている魚を盗ませる話。そして、その魚を盗まれた本人にふるまい、すべてをばらすという落ちがついて

いる。

鯖が、日の光を黄色にするほど大量に湾に追い込まれるが、ほとんど捕ることができなかったという、うそのような本当の話。

1916年のダブリンでの反乱の話が島まで伝わり、‘The Irish are awake.’と色めきたったという話。

このように、必死で生活している村人の息使いまで伝わるペイグの口調は、見事であり、興味深いものである。このペイグの1964年初版の著書が2000年にもオックスフォード出版局から再版されているのも理解できる。

4. むすび

井形慶子氏の「英国セント・キルダ島の何も持たない生き方」³⁾のなかで、ブラズケットと同じくケルト人の住むセント・キルダ島では、イギリス人とキリスト教が入ってきて、セント・キルダ島の人々のかつての生活と文化が失われたプロセスを明示し、文化とは何かという問題提起をしている。ブラズケット島では、セント・キルダ島のように歌を禁止されることはなかったが、セント・キルダ島と同様に島を離れ島の暮らしと文化はなくなった。ブラズケットでのストーリーテリングの文化はすたれ、ゲール語をしゃべる人は少なくなった。ブラズケット特有の文化は、消滅寸前と言える。

ペイグ・セイヤーの回顧録²⁾を読むと、隣人との争いなどは今日も、変わっていないものだと感心させられる。この本からは厳しい自然の中で誇り高く生活していたブラズケットの人たちの息使いと精神が伝わってきて、胸が熱くなる。

ゲール語でペイグの話や歌が聴けたら、もっと生き生きしたニュアンスが伝わったかもしれない。アイルランドの言葉と文化が失われることなく、これからも残っていくことを祈りたい。

謝辞

2002年にアイルランドのディングルに行ったとき、B&BのKerry夫妻は、ブラズケット島のビデオを観せてくれ、また、島が見えるところまで車で連れて行ってくれた。「人が横たわっているように見えるでしょう。」と言った夫人の言葉とブラズケットの島影がいまも耳と目に残っている。アイルランドの文化を守ろうとして、いろいろ紹介してくれた夫妻に感謝する。また、ディングルに行くことを強くお勧めいただいた佐野哲郎先生に感謝する。

参考文献

1. Stables, Joan & Ray, *The Blasket Islands*, The O'Brien Press, 2001
2. Sayers, Peig, *An Old Woman's Reflections*, Oxford Univ. Press, 2000
3. 井形慶子、「英国セント・キルダ島の何も持たない生き方」、講談社、2003